

第8回「三世代をつなぐ駒カフェ」開催の報告

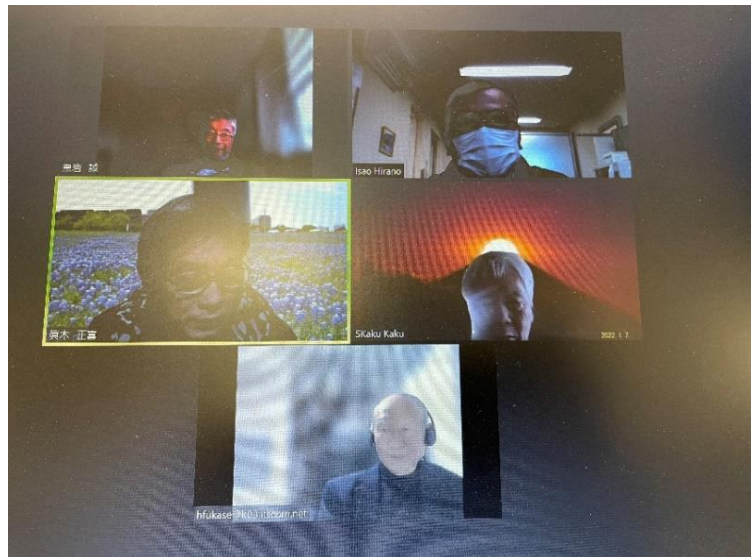
第8回「三世代をつなぐ 駒カフェ（在校生対象）」は、2022年1月22日（土）13時から開催予定でしたが、新型コロナウイルスのオミクロン株による感染者・濃厚接触者の急増を考慮して大変残念ですが中止とし、スタッフのみの Zoom による「駒カフェ」に変更した。

OB スタッフの「駒カフェ」では、今まで開催した第1回から第7回までの駒カフェについて、来年度以降の駒カフェについてなど、それぞれが感じていること、思っていることを自由に発言し、その発言を受けての疑問や質問などをさらに突っ込みを入れる発言もあり、という感じで、活発な意見交換をすることができた。

スタッフの感想

- ① 駒カフェもついにスタッフのみの ZOOM 開催になってしまいました。長期にわたるデルタ株やオミクロン株によるコロナ禍が、先生方や駒東生をかつてない混乱に陥らせていることは残念です。一方、こうした環境の激変に対しては、先生方と駒東生とが深いコミュニケーションを通して状況をよく理解しあい、回避することなく相互に智慧を絞りあうことで、独創的で多様な対応を見だし新たな駒東のイメージを付け加えるきっかけになってくれたらと願っています。

駒カフェの在り方に関して、駒東の教育理念の再確認の話ができました。私たち七回生世代は、菊地龍道先生の「頭脳の資源化」の真っ只中にありまし



た。それは、昨年 12 月 25 日付朝日新聞「校長から受験生へ」という記事で、小家校長が「『自分で考える』愚直に追求」という記事のなかでご指摘になっている、学習の姿勢としての「主体性をもって深く考え続けること、身のまわりの現象を自分の感受性をもって捉えること」に充分引き継がれていると思います。客観を前提とする「現象」という言葉が使われていることに、科学や合理性を重視する駒東の姿勢がよくできているとも感じました。

駒東生には、やりたいことが早くからはっきりしている場合とか、とりあえず名門校に入学することを目的にしている場合とか、多様な在り方が併存しているようです。こうした多様な在り方に柔軟に対応することは先生方のみでは負担が大きすぎるのではないかと思います。そしてコロナ禍のようにいつなが起きるかわからないという今日、卒業生や保護者 OG などを含む幅広いステークホルダーによる柔軟な支援ネットワークが構築され、こうした多様な状況にきめ細かな対応が図れたら駒東の強みの一つになるのではないかと思います。駒カフェがそうしたネットワーク作りの第一歩になればいいのですが。

- ② 小家校長の書かれた「『自分で考える』愚直に追求」の記事について思いついた事があります。「オンラインではやはり学力差がついてしまう」という記述がありました。確かにそういう面はあると思いますが、ある意味でオンライン授業は、教育のノウハウ、コンテンツなどを集大成し、その知的財産を確立する絶好の機会だと思います。セキュリティの課題はありますが、授業内容をアーカイブしておけば、復習したり、コンテンツの完成度をあげていくなどの事に大変役立つのではと考えます。その為には、コンテンツ作成部隊が必要ですし、それを展開し、いつでも活用できるようなプラットフォームも必要になります。その費用も必要になります。卒業生や PTA、大学などの支援が必要になります。そこに限定したクラウドファンディングも視野に入れる必要があるでしょう。当然ですが、AI の活用は必須です。これは、母校の価値を大きく高める為にも重要な事だと思い駒場東邦のスタークホルダーが連携し、一丸となってなすべき事だろうと思いました。このような思いつきは、昔のコンサルティング会社の買収時に知った事から出てきました。コンサルティング会社の一番の資産は、積み重ねてきた、情報、技術のコンテンツそのもので、これだけは買収の対象にする事ができませんでした。これが彼らの価値の正体だと感じました。
- ③ 今回の「駒カフェ」は、急遽のコロナ対応で、平野先生と世話人の会（Zoom）となりました。1 年間の活動を振り返って、今後の展望を話し合う、有意義な会でした。「校長から受験生へ」（2021 年 12 月 25 日、朝日新聞）の記事「『自分で考える』愚直に追求」（小家校長）から話が始まりました。「駒カフェ」でも、参加者一人一人の異なる個性を活かして、各人の興味を伸ばす場になることを目指してきました。

ここで、中学1年（62年前）に習って今も大事にしている言葉を思い出しました。帰宅後に、当時の教科書「漢文巻一（清田清先生編著）」の2箇所を読み返しました。

論語（為政）：子曰、学而不思則罔 思而不学則殆

松下村塾の聯：自非讀萬卷書 安得為千秋人 自非輕一己勞 安得致兆民安

論語の言葉は、知識の習得と思考による展開が必要であることを戒めたもので、吉田松陰の言葉は、知的努力、自己研鑽、切磋琢磨の重要性を訴えているものと思います。

教科書の内容を理解するだけでなく、自力で展開することが重要とであるとたたきこまれたように思います。思考の展開に伴って、新たな知識が必要となり、その学習の成果でさらに思考が進む、ということで納得したことが思い出されます。

さて、昨年（2021年）は、「駒カフェ」の理念について議論し、実施方法を模索してきました。そして、今年の課題は、持続性のある「駒カフェ」の青写真を示すことにあると思います。駒東に、再度集まった現世話人（第1期）は、気心が知れた60年前の同窓生であって、その強みは、①補足的な知識の共有と集約ができること、②多様な60年の人生経験は集約すると人数倍（5倍）以上の総合力になること、と感じます。

元校長、元教師、元邦友会会長、カウンセラーを含む奇跡のメンバーで、「駒カフェ」の継承を考える、心地良いネットワークの集まりでした。

- ④ 私は中高の頃から「人間の心」に関心がありました。大学は日本史学科でしたが そのテーマは宗教とか心理・日記・文学・芸術といった“心の問題”を彷徨っていました。「駒カフェ」のスタッフに入れてもらってからも その傾向は変わらず 生徒の心の問題がいつも気になっています。

人間はすばらしく美しく優しい心を持っていると同時に その同じ人間の心に 仏教でいう三毒、すなわち、貪（とん）（欲望）、瞋（しん）（怒り 憎しみ）、痴（ち）（ありのままに正しく理解しないこと）が潜んでいます。それを自分のものとして客観的に自覚できればいいのですが なかなかそうはいきません。そんな生徒とどうしたらよりそえるのか？それは私ごときものにとって傲慢なことではないのかと反省しつつ生徒と接していきたいと思います。

- ⑤ 第8回駒カフェ。楽しい駒カフェでした。一生懸命準備していた在校生対象の計画が頓挫しました。でも、神様は優しいまなざしをくださりました。コロナの成り行きで、zoomでOBスタッフのカフェに切り替えました。そんな1日でした。今回は、企画のスタッフミーティングとは違います。カフェという自由なおしゃべりの場。リラックスした状況で相手の顔を見て、思い浮かべる心象を口にすることが出来ます。「駒カフェ」という名称はだれかが言い出すというでもなく、なんとなく「いい

ね！」ということになりました。パリのモンパルナスの「カフェ」。ゴッホの夕暮れの煌々と輝く「カフェ」。まるで、モンパルナスで通りを眺めながらのように、7回生のOBが初めて駒カフェのテーブルについてみた次第です。自由な発想の楽しさを味わいました。私にとっての駒カフェの密かで、個人的で、ごく具体的イメージは半世紀少し前、駒東を卒業してから学生時代の心象風景です。早稲田茶房という溜まり場が私それです。太い柱が組まれ、白壁の和風の山小屋風の建物の、木製のドアを入ると、白壁に石を敷き詰めた土間の木の椅子席。和風の庭には、手水鉢、座敷には、生花の生けられた床間。土間の隅の木のテーブルは、常連さんたちのグループごとの連絡帖が10冊ほど置いておいてあります。連絡帳にはなんとなく仲間の動静がうかがわれ、ニヤニヤしながら目を通せます。三々五々、仲間が集い、喧々諤々、お金のある時は、海苔煎餅つきの煎茶、一番高いココア。ない時は、出口に近く陣取り、水だけ飲んでいるか、一番安いコーヒーを飲んで、そっと最初に店をでる！ここに来れば誰も居なくとも仲間の気配に包まれる。これがわたしの駒カフェイメージの原点です。75歳にして、駒カフェの仲間、素敵です！

- ⑥ 邦友プロムナード第51号に掲載された「三世代をつなぐ駒カフェ」の紹介記事を読みましたと連絡をくれたOBがいました。「駒カフェ」でどのようなことをやっているのかと関心を持ったので、見学したいとのことでした。

「駒カフェ」は、居心地がよくて、集まった仲間が自由な発想で、言葉のキャッチボールをして、それぞれが何か新しいことに気づき、今後活かしていこうと思うきっかけ作りの場が出来たらと思う。若い世代のOBたちの中に、「駒カフェ」設立趣旨の理解者を増やしたい。そして、将来的には「駒カフェ」スタッフの一員として参加していただけることを期待しています。現在駒カフェに参加している在校生も本校卒業後に大学生、社会人になったとき、駒カフェに関わってくれるようになったらいいな・・・という夢を持っています。



「三世代をつなぐ駒カフェ」運営事務局

代表 黒岩 誠

(駒場東邦7回生 / 前スクールカウンセラー)

平野 勲

(駒場東邦中学高等学校 特別顧問 / 前校長)

連絡先 komacafe1540001@gmail.com